巻頭言

都市における水辺環境*

川原 浩**

略 歴

昭和35年 東京都都市公害部入都
43年 東京都公害研究所
49年 同上水質部長
60年 東京都環境科学研究所名称
変更
61年 同上参事研究員
技術士（水道部門）
趣 味 釣り ゴルフ 囲碁

最近、「アメニティ」ということがよくいわれている。これは「快適さ」を求める都市住民の意見の高まりを示すもので、今までの都市政策を見直すべき一つの転機になるように思われる。特に、都市環境の悪化は大気環境、水環境についての再検討が求められてきているのではないかといえる。

従来、都市の発生は河川を中心にその流域の自然を開発してつくられてきた。古代文明が発展してきたのも河川を中心としてきたことは周知のとおりである。これらはいままでもなく、人間の生活が水と密接な関係をもって発展してきたことを意味する。人間がその川の水を利用しながら文明、文化がつけられ発展してきたが、ある時は水害という天災によって壊滅的な打撃に遭遇しながらも、そのつどそれを乗り越えて都市社会を維持、発展させてきた。そして、そこには都市と自然とのバランスがある程度保たれながら発展してきたといわれている。

しかし、今世紀後半からの都市の発展（集中ともいわれる）は異状なスピードで進展し、その結果の一つに都市環境の悪化があげられる。情報化社会の出現は超過密化社会の到来を助長し、しかも、21世紀にむかってさらに集中が進むような傾向にあるといえる。それにしたがって、都市環境はさらに悪化するのではないかと憂慮される。特に、大都市内での水辺環境が将来的にどのような都市空間として存在するのであろうか。

東京都内の河川、水路は大小混ざって蜘蛛の巣のように張りめぐらされている。これがかつての江戸の街を情緒豊かなものとして、その役目を背負ってきたものであった。しかし、江戸から東京への変革は近代都市への幕開けと同時に人口の急増を招くことになり、こ

の情緒豊かであった水辺環境に直接影響を与えるようになった。理由の主なものとは都市基盤整備の遅れによる水質の悪化であり、また、水辺環境の改修による人間と川との切り離しをあげることができる。河川改修は都市整備の一環として防災上の観点から行われてきたもので批判すべきことではないと思われるが、結果的に住民と川を切り離したことになる。これは水辺から人が遠ざかる結果となり、水質、水辺環境等の悪化に拍車をかけることになる。汚されて下水路と化した水路はもはや川の役目は消失してしまったことになる。一部でみられる埋立、暗渠化によつての散策道公園化は都市空間としての効果的な再利用法の一つであるといえるかもしれない。しかしながら川の本来の役目は飲料水源、農業水産用水、交通輸送手段として活用できるものでなければならない。水質の悪化はこの機能を低下させ、あるいは利用不能とし、一方では環境悪化の一因となつてきている。また、都市化の進展は水害の頻発を招き、その防止策上河川改修が行われ、住民からはますます遠くへ離れてゆく形がみられる。これではせっかくの都市空間の持つ意味が半減するように思われる。コンクリートとアスファルトに囲まれた都市生活の中での川は潤いや安らぎを与えてくれる貴重な都市空間であることを考えると、ゆつたりと落ちついた景観をつくり出す都市空間であることが強く望まれる。これを実現してゆくためには従来の水質汚濁対策だけでなく、水辺環境の創造と保全が不可欠の要件であり、それによって快適な都市環境が期待できると考える。

* The Waterfront Environment of the City, 1989年5月8日受理

** Hiroshi Kawahara, 東京都環境科学研究所参事研究員